池波正太郎

闇の狩人（上）

闇の狩人（上）

新潮文庫　　い-16-7

昭和五十五年九月二十五日　発行
平成六年三月十日　三十八刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六—五一一一
編集部（〇三）三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Toyoko Ikenami 1974　Printed in Japan

新潮文庫

闇の狩人

上巻

池波正太郎著

闇の狩人

上巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ひろいもの

温泉は、川床からふき出ている。
そこへ、丸太づくりに板屋根の小屋掛けがしてあった。
岩と丸太でかこんだ浴槽から、清澄な温泉が滾々とあふれ、岩石で区切られた谷川のながれへ渦を巻いて入りまじってゆくのである。
「ああ……」
温泉にくびまでつかり、雲津の弥平次は何度も嘆声をもらした。
たまらないこころよさであった。
（すっかり、よくなったなあ……）
しみじみと、弥平次はそうおもった。
今年で四十二歳の弥平次は、盗賊・釜塚の金右衛門の〔片腕〕だなどと、盗賊仲間でうわさをされている男だ。
小柄で細い躰つきなのだが、裸になると筋肉が針金でも縒り合せたかのように、ひきしまっていた。
頬骨の張り出した顔いっぱいを、ふとい鼻がしめている。
口は小さい。細い眼が柔和であった。

筆にふくませた濃い墨が、ぽたりと紙へ落ちたような眉毛なのである。

こうして、ひとりきりで山深い谷間の温泉につかっている雲津の弥平次は、このあたりの木樵や百姓たちと区別がつかぬ。とうてい、これがその道で知られた盗賊だとはおもえなかった。

去年の春。弥平次は、釜塚一味の盗賊十五名と共に、大坂の天満十一丁目にある薬種問屋〔対島屋宗七〕方へ押しこみ、金五百九十余両を盗み奪って逃げた。

そのとき、どうしたわけか身のかるい弥平次が、めずらしく対島屋の塀から飛び下りそこね、右脚の骨をいためたのである。

それが悪化した。

いまでいう〔リウマチ〕のようなものであったのだろうが……。

弥平次が、この山の湯のことをきいて、はるばるやって来てから、もう二た月ほどになる。

あれほどの激痛が、いまは、ぬぐったように消えてしまった。

（そろそろ、江戸へ帰るか……）

このごろは、足ならしのためもあって、昼すぎに一刻（二時間）ほど、まわりの山道を歩くのが習慣になってしまった。

湯からあがると、弥平次は渓流沿いの山道をさかのぼって行った。

山は、むせ返るような緑につつまれている。

老鶯が、しきりに鳴いた。

そして、この日。弥平次は、おもいがけぬ〔ひろいもの〕をすることになったのである。

〔ひろいもの〕は、人間であった。

この日の弥平次は、いつもとちがう山道を踏みのぼって行った。

このあたりは、上州と越後の国境に近い。

前の日に、湯へつかりに来た炭焼の老爺が、その山道を半刻（一時間）ほどのぼって行くと、峠の上に出て、

「そこへ立つと、越後の山が、よく見えるだよう」

と、いっていたのをおもい出し、

（ひとつ、のぼってみるか）

弥平次は、いささか気負いたっていた。

二た月前に、此処へ来たとき、弥平次は山駕籠に乗り、痛みに顔をゆがませつつ、まるで死ぬようなおもいで、たどりついたものであった。

それだけに、ここまで回復したのが、うれしかった。

（ぐずぐずしては、いられねえ）

そうなると、一時も我慢ができなくなった。

首領の、釜塚の金右衛門は、

「半年でも一年でもいい。ゆるりと逗留して、すっかり癒して来てくれ。それでねえと、わしが困る。これから先、まだまだお前にはちからになってもらわぬとなあ」

そういってくれた。

六十をこえた金右衛門は、小頭とよばれる雲津の弥平次を、たよりにしきっている。

つぎの〔おつとめ〕は、江戸でやることにきまっていた。
〔おつとめ〕というのは、盗賊たちの間でつかわれる隠語であって、つまり〔盗みをはたらく〕ことをさす。
「今度は、わしがやるから大丈夫だ」
金右衛門は、そういってくれたけれども、弥平次としては、近ごろとみに老いが目立ってきた〔お頭〕ひとりの采配では、
（こころもとない気がしてならねえ）
のである。
暗い杉木立の斜面についた山道を、弥平次は汗みずくになってのぼった。
山道は、ふたたび渓流に近い崖下へぬけている。
その、切りたった崖の下で、弥平次は、
〔ひろいもの〕
を、したのであった。
そのあたりも、木や草におおいつくされている。
黄白色の穂状の小花をふさふさとつけた栗の花が強く匂っていた。
梅雨も間近い。
草むらの中に、人の足が投げ出されているのを見て、
（や……?!）
弥平次は、とっさに身を屈めた。

（死んでいる……？）

と、弥平次は見た。

草の中から出ている足が、べっとりと血に濡れていたからだ。

二本の足は、静止していた。

近寄って見て、

（おや……死んではいねえようだ）

草に埋もれて倒れ伏しているのは若い侍であった。

二十四、五歳に見える。

顔面は青ぐろく変色していたが、鼻すじのすっきりとした、眉の濃い、

（いい男だな）

であった。

両眼を閉じ、口をかたく噛みしめていい、くちびるの間から血が一すじ、ながれていた。月代もだいぶんにのびている。

黄ばんだ帷子の裾を端折った旅姿で、袴はつけていず、肩へななめに小さな荷物を背負っていた。

若い侍は、うつ伏せに倒れていた。

（崖から落ちた……）

と、弥平次は感じた。

着物も手足、顔も泥まみれで、ところどころに切傷と擦過傷の血がにじんでいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そして、侍は大刀の鞘だけを腰に帯している。中身はなかった。
（これは、いってえ、どういうことなのか？）
侍の鼻へ手をあてて見て、まさに、
（生きていやがる）
と、弥平次は確認をした。
（これは、崖の上のどこかで斬り合いをしているうち、足をすべらし、崖から此処へ落ちたのにちげえねえ）
弥平次の推測は、あやまっていなかったようだ。
そのとき、弥平次は前方の森の中で、数人の声がするのをきいた。
（こいつ、追われているらしい）
追われる身に弥平次がなれるのは、盗賊という稼業ゆえにであったやも知れぬ。
弥平次は若い侍の半身を起し、すばやく背負った。
意外に、軽かった。
間もなく、雲津の弥平次は、まだ気をうしなっている若い侍と共に、杉林の中の道もない窪みへ横たわっていた。
弥平次は、痩せおとろえた侍の躰を抱くようにしている。
その感触が、尚更に弥平次の同情をよんだ。
（若いのに、ずいぶん、ひどい目にあってきているらしい）
下の山道で、声が起った。

「おらんぞ、どこにも……」
「たしかに、この辺りへ落ちた。間ちがいはない」
「早く、さがし出せ。逃がしてはならぬ」
「もっと、向うへ行って見よう」
弥平次は、すくなくとも四人ときいた。

それから、どれほどの時間が経過したものか……。
弥平次は、よくおぼえていなかった。
（とにかく、いま、出て行ってはあぶねえ）
ことだけは、たしかなことであった。
若い侍は、窪みの腐葉の上へ横たわり、死んだようになっているが、心ノ臓の鼓動は打っているし、まるで深いねむりをむさぼっているかのようだ。
血と土に汚れた顔は平穏なもので、弥平次が何度も肩をゆさぶってみても、眼をあけようとはせぬ。
ほかに、蘇生させるための方法はあったが、うかつによみがえらせても、
（かえって、やりにくい）
弥平次は、そうおもった。
高い切りたった崖から落ちたときに、躰も頭も打撲したのであろうが、このまま息が絶えてしまうともおもわれなかった。現に侍の顔へ、わずかだが血の色が浮いてきはじめている。

（さて、どうするか……？）

先刻、山道できこえた男たちの声は、二度ときこえなかった。

弥平次は、若い侍を窪みへ横たえたまま、おもいきって自分ひとりで山道へ出てみた。

渓流の両崖はけわしい山肌だけに、もう日が翳りはじめていた。

弥平次は急いで、引き返した。

山の湯は〔坊主の湯〕と、このあたりでよばれている。なんでも、むかしむかし、弘法大師が上州から越後を巡歴した折、この山中にわき出る温泉を発見したといういいつたえがあるので、その名がついたものであろう。

〔坊主の湯〕は、辺鄙な山中にわく温泉だけに、客を相手の〔湯場〕とはいえない。

炭焼や木樵、猟師、それに近辺の村人たちがこれを利用しているわけだけれども、雲津の弥平次のような客が、この温泉のすばらしい効能をききつたえ、湯治にやって来ることもある。

だから、渓流の浴舎の上の、わら屋根の母屋には、客用の部屋が三つほどあった。

弥平次は、その一つへ入っていた。

〔坊主の湯〕のあるじは、市兵衛といい、五十がらみの大男で、猟師もすれば、谷間を切りひらいて百姓もしている。

女房は十年ほど前に亡くなったというが、おたまというむすめがひとりいて、父親をたすけていた。

弥平次が、坊主の湯の母屋へ近づいて行くと、市兵衛が出て来て、

「山で、何かあったのかね？」

いきなり、問いかけてきた。
「どうしてだ？」
「弥平次どんは、山へ行ったのだろう？」
「うむ」
「何か、見なかったか……実はな、さっき、妙な侍たちが四人、山のほうから此処へ来て、若い侍をさがしていたでよ。四人とも手傷を負っていてなあ。そりゃ、ものすごい顔つきでよう」
「そうか。それについて市兵衛さん。ちょいと、はなしがある」
「え……？」
弥平次は、市兵衛を自分の部屋へつれこんだ。
市兵衛も、もとは盗賊であって、これは越後から北陸道にかけて盗みをはたらく、滝谷の勘助の手下だったそうな。
滝谷の勘助は、すでに病歿しているが、その息子が二代目の勘助となり、依然、盗みばたらきをつづけていることは、弥平次もよく知っている。
弥平次と同じ、釜塚一味の盗賊で正体の辰五郎という男が、
「おれの、むかしの仲間で、上州と越後の国境にある湯場のあるじになった男がいる」
と、市兵衛のことをはなし、
「なんでも、そこの湯は、小頭のような病いには実によく効くといいますよ。あっしが市兵衛へ手紙を書くから、ぜひ、行ってごらんなさい」
すすめてくれたのであった。

正体の辰五郎は、釜塚一味になる以前、滝谷の勘助の下ではたらいていい、市兵衛とは顔見知りの仲だったのである。

それだけに、弥平次も居ごこちがよく、安心でもあったわけだ。

「実はな、市兵衛さん……」

と、弥平次は、杉林の窪みへ隠してきた若い侍のことを語った。

「ふうん。その侍は弥平次どんの、知り合いなのかね？」

「いいや、まったく知らねえ」

「ふうむ……」

「もしかすると、おれがここへもどっている間に気がついて、どこかへ行ってしまったかも知れねえが……それならそれでいい、と、こうおもってね」

「他人のことだからな」

「そうさ。では、このままに打っちゃっておこうか……」

「ふ、ふふ……」

市兵衛が微かに笑って、

「だがよう、お前さんの肚の中は、別のことを考えている」

つぶやくように、いった。

「そう見えるかね？」

「お前さんは、そういうお人らしいものなあ」

「見ているうちに、あの若い男が、なんとなく可哀相になってきてね……」

「おれは、さっき、ここへ来た四人づれの侍どもは、大きれえだよ」
四人の侍たちは、市兵衛が制止すると、
「おのれが居ないというても、彼奴(きやつ)めが入りこんで隠れているやも知れん」
と、わめきたて、市兵衛を蹴倒(けたお)し、母屋から浴舎まで土足で踏みこみ、部屋の中もめったやたらに探しまわり、弥平次の荷物も蹴散らかして行ったのである。
そのときの憤懣(ふんまん)が、反動的に、
「よし。その若い侍を助けてやろうよ、弥平次どん」
と、同情にかわった。
いつの間にか、夕闇がたちこめていた。
「弥平次どん、もう、いいだろうよ」
「で、その四人の侍は、どっちへ行ったね?!」
「川下(かわしも)へ道をたどり、猿鳴(さるな)きの村のほうへ行ったよ」
「む。それなら大丈夫だ」
二人は、すぐさま外へ出た。
山と山とに区切られた夕空は、まだ明るさを残していたけれども、谷底のこのあたりは見る見る暗くなってゆく。
市兵衛は、ぬかりなく提灯(ちようちん)の用意をしていた。
「市兵衛さん。いたぜ」
杉林の中で、弥平次がいった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com